

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	太田 雅代
			職 位 ・学 位	氏 名 印
論文審査担当者	主 査		慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 教授・同研究科委員・博士(国際公共政策)	堀田 聡子
	副 査		慶應義塾大学総合政策学部教授・大学院健康マ ネジメント研究科委員・博士(政策・メディア)	秋山 美紀
	副 査		慶應義塾大学環境情報学部教授・政策・メデ ィア研究科委員・医学博士	濱田 庸子
	副 査		慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 教授・同研究科委員・博士(医学)	山内 慶太
(論文審査の要旨)				
<p>太田雅代君提出の学位請求論文『自閉症児をもつ母親の障害受容過程』は、自閉症児をもつ母親の心理的過程について、障害受容の観点から検証することを目的としたものである。</p> <p>従来、親の障害受容に関する研究は、多くが本人の障害受容に関する受容過程の多段階説、価値転換説等に基づいてなされて来た。しかしながら、その殆どは、臨床的な経験と理論的考察に基づくものであり、実証的な検証は十分になされているとは言い難い。また、障害受容の段階と障害に対する価値転換は内容的に類似するものではあるが、その関連についても十分な検証はなされていなかった。このことは、自閉症児の母親の障害受容過程についても同様であり、自閉症児並びのその母親への支援を向上する為には、心理的受容の段階説を検証すると共に、価値転換との関連についても検討することが必要である。</p> <p>本論文は、主に4つの研究からなっており、以下の6章で構成されている。</p> <p>第1章「序論」に次いで第2章「わが国における広汎性発達障害児をもつ親の心理に関する研究の動向」では、自閉症児を中心に、広汎性発達障害児をもつ親の心理に関するわが国の研究の動向を概観した。障害受容過程のモデルの代表的なものに段階説があり、これまで様々な段階説が提唱されてきたが、初期のショック期と最終期の安定期を含む点では共通しており、中間期にあたる葛藤期をいくつに分けるかの違いに過ぎないことを指摘した。また、近年は親の心理的危機が特に高い時期の心理過程を詳細に記述する質的研究が多くなっているが、受容の段階の移行を検討するには長期に及ぶ障害受容過程全体を捉えた研究が重要であることを指摘し、そこで求められる膨大な質的データの客観的な分析にテキストマイニングの活用を提案した。</p> <p>第3章「母親からみた自閉症児の養育の特徴—テキストマイニングを用いた探索的分析—」では、自閉症児をもつ母親19名に1対1の半構造化面接を実施し、逐語録をテキストマイニングによって分析し、クラスター分析を実施した。その結果、「家族のあり方」「遊びの困難」「知識や兄弟姉妹・友人の重要性」「医療と診断告知」「就園就学」の5つに関して自閉症児の養育の特徴が見出されたが、これらは質的分析による従来の研究で得られた知見とほぼ一致するものであった。また、従来の質的研究の方法で収集したデータにテキストマイニングを適用する有用性を確認した。</p> <p>第4章「自閉症児をもつ母親の障害受容過程—受容前と受容後の比較」では前述のデータを、受容前と受容後についての語りに分け、テキストマイニングの諸分析により検討した。その結果、Jaccard の</p>				

類似性測度で見た特徴語、共起ネットワークで見た頻出語の共起関係等からも、受容前と受容後には大きな相違があり、障害受容過程には段階が存在することを確認した。またその内容の分析から、受容の段階への移行には価値転換が関わっていること、価値転換後の母親の心理には特徴があることを示した。

第5章「自閉症児の兄弟姉妹の有無と母親の心理的適応」は、自閉症児に兄弟姉妹がいるかいないかによって、母親の心理的適応に相違があるかを検討するために、Jaccard の類似性測度、共起ネットワークにより分析した。その結果、子どもが1人の母親と子どもが複数いる母親では語りの内容に違いがあり、後者では、自閉症児の育児を俯瞰し、相対化する視点を獲得しやすいことを示した。

第6章「研究総括」は、第2章から5章にまとめられた4つの研究について総括すると共に、母親の支援のための本研究の実践的意義を提言している。また、本研究で用いたテキストマイニングの方法論上の意義についても論考している。

本論文は、主に以下の点で評価できる。

- ① 本研究は、調査対象から丁寧なインタビューを行うと共に、そのデータと丁寧に行き来しながら分析、論考を進めていることである。特に、母親から子供の障害に気付きはじめた頃からの長期にわたるリアルな語りを引き出している点では、対象との間に良いラポールが形成されていることが推察される。同時に、誘導的にならずに客観性を高めるための姿勢が窺える。このようなインタビューが本研究の基礎にあることは評価して良いと思われる。
- ② 本研究は、そのインタビューによる母親の語りの内容の分析に、テキストマイニングを駆使していることである。質的研究でしばしば課題となってきた、分析の客観性・再現性の確保と、作業の膨大さの克服に、テキストマイニングが有効であると指摘されてはいるが、実際の応用事例は多くない。その中で、テキストマイニングの多様な分析手法を模索した中で得られた方法論が本論文には提示されており、自閉症研究に留まらず、福祉・医療・教育・心理など多領域でのインタビューデータの分析研究にも寄与し得るものである。なお、本研究では、テキストマイニングにおいて計量的な解析で終わるのではなく、算出された重要語や共起語について、適宜それを含む文章を抽出し、元のインタビューデータに戻った検討を行っていた。このように、テキストマイニングソフトの抽出機能を活かすことで、テキストデータの数値化によって元のデータの豊かさを損なうという懸念を克服していたことも評価できる。
- ③ 本研究では、受容に当たって価値転換が関わっており、それと関連して受容後の母親の心理を示す語りは、i) 回復を断念する(そして行動が積極的に転じたりする)、ii) 自己中心的視点から脱し他者中心的視点を獲得する、iii) 子供に固有の価値のあることを重視する、という特徴があることを示したことである。そして、これらをはじめとする本研究の知見をもとに、母親の支援に際しての留意点を提示していることも評価できると思われる。

以上のことから、本研究の成果は、自閉症児の母親の障害受容過程に新たな知見を加えると共に、自閉症児の母親の支援の向上に寄与するものであるが、その際に幾つかの課題がある。

第一に、本研究が対象としたのは、協力が得られた特定の地域の親の会に属している母親を対象にしていることである。障害受容過程全体を長期間にさかのぼって語れるという点では、相互に自らの経験を語ることの多い親の会の会員は適しているが、今後、支援のネットワークが異なる他の地域や親の会に属していない母親についても比較検討する必要があるだろう。加えて、近年、自閉症概念が、いわゆる中核群から自

論文審査の要旨

No.3

閉症スペクトラムへと広がっているが、前者の親が概して親の会に参加しているのに対して、後者の親は親の会には参加しない傾向にある。従って、今後は本研究が対象を拡大し、中核群と周辺群を対比する研究に展開することが期待される。

第二に、本研究は受容の段階説を裏付けると共に、受容過程における価値転換に注目しているが、価値転換の契機については控え目に言及されているに過ぎないことである。第4章に付された、「変わる」と「気持ち」・「考え」が共起した箇所の受容後の語りを抽出した表にも、その論考に資する内容が見出されることから、本研究のデータを更に分析し、価値転換の契機についても考察・提案がなされることが期待される。

質疑においては、以上の内容に関する質疑に加えて、インタビュー方法についても議論がなされた。即ち、本研究では長期にわたってさかのぼり、確定診断や受容の時期のことを詳細にインタビューしているが、リアルに語って貰う為の工夫をどのように行ったか、をはじめとする質問に対して詳細に回答がなされた。既に言及したように丁寧に集められたインタビューデータは本研究の評価される特色でもあるだけに、その工夫はもっと詳細に記述されていて良かったのではないかとの憾みが指摘された。

本学位請求論文は、上記のような課題は残るものの、障害受容過程の研究としても、テキストマイニングの質的研究への応用事例としてもその意義が高く、審査担当者は一致して、太田雅代君に博士(医療マネジメント学)の学位を授与することが適当であると判断した。